広域観光ルート形成と観光戦略

―産官学民連携プロジェクトによる観光マネジメント―

前　原　正　美

要　旨

2009年９月，国土交通省･前原誠司大臣の指揮のもと，各自治体による広域観光地域の設定，地域全体の観光体制づくり，観光マネジメントの変革が本格化し始めた。観光産業を取り巻く国際環境の変化を背景として，日本の観光産業には，国際競争力の向上と広域観光圏の形成が求められている。複数の観光地をひとつの広域観光圏として結ぶためには，共通のテーマが必要である。広域観光圏の形成のためには，日本の歴史･文化･伝統にもとづく共通テーマが必要である。また広域観光圏のイメージ形成には，大河ドラマなどのマス･メディアの活用が非常に有効的である。真の観光誘致は，観光産業に関連する人びとすべてが，自らの観光地域の歴史･文化･伝統を熟知してはじめて可能となる。地域の顕在的観光資源を生かし，さらに潜在的観光資源を発掘して観光力を高めれば，観光産業は，自然との共生を図りながら経済を持続的に発展させるサステナビリティの高いリーディング産業（基幹産業）へと成熟することが可能となるだろう。

はじめに

政府の2003年「観光立国日本」宣言に伴い，国土交通省「ビジット･ジャパン･キャンペーン（VJC）」が打ちだされ，2006年12月には，「観光立国推進基本法」が成立，観光立国の実現のための「観光立国推進基本計画」が策定されている。観光産業を日本のリーディング産業（基幹産業）へと育成し，サステナビリティ（持続可能性）の高い産業構造を構築するための観光戦略が策定され，施策が推進され始めた。2008年国土交通省に観光庁が発足したことは，観光産業の発展にとって大きな意義がある，といえよう。

2009年９月16日，民主党政権が成立し，国土交通大臣に前原誠司氏が任命された。ハブ空港の整備，高速道路の段階的無料化への取り組みが始動するなか，航空機や新幹線利用から高速道路利用へ，また逆に，高速道路の混雑を避けるために，乗用車から航空機や新幹線へと移動方法を変える観光客も予想される。今後，観光のあり方が大きく変わるだろう。

本論文の目的は，「観光立国日本」の実現のためには，各地方自治体の独自の観光戦略の策定，広域観光ルート形成のための各自治体間の協力と産官学民連携プロジェクトの導入の必要性を提言することにある。

本論文の第１章「産官学民連携プロジェクトと観光マネジメント」では，各地方自治体が策定した観光戦略を展開してゆくうえでの観光マネジメントについて考察する。広域観光ルートを形成するた

めには，各自治体の独自の観光戦略と，連携プロジェクト体制の導入の双方が不可欠である。具体的には，「東北観光推進機構」および宮城県の観光戦略について分析する。宮城県には他府県と異なる独自の観光戦略が展開されている。そこで第１章では，宮城県の「みやぎ観光戦略プラン」における３つの戦略プロジェクトの実態を考察し，観光マネジメントにおける産官学民連携プロジェクト導入の重要性を主張する。あわせて観光学会および大学の観光学科に期待される役割についても考察する。

第２章「広域観光ルート形成と観光戦略」では，観光産業を日本のリーディング産業へと育成するためには，各地方自治体が独自の観光戦略を策定し展開とともに，複数の地方自治体にわたる広域観光ルートを形成してゆくことが不可欠であることを，実証例にもとづき経済的視点から主張する。

第３章「日本の歴史・文化・伝統から学ぶ経営戦略」では，東北の雄藩・伊達藩の基礎をつくった伊達政宗の領地経営の考察を通じて，宮城県の歴史・文化・伝統の独自性を分析する。

第１章　産官学民連携プロジェクトと観光マネジメント

1－1　観光を取り巻く国際環境の変化

世界観光機関（UNWTO）は，世界の外国旅行者数は2020年には15億人を超え，世界の交流人口の拡大の主導はアジアとなる，と予想している。経済のグローバル化により，中国，韓国，台湾，ASEAN諸国には所得の向上した層の海外旅行需要が高まっている(1)。アジア地域を中心として，大きな観光の構造変化が起きるであろう。

日本政府は，こうした国際環境の変化を背景として，ハード・ソフト両面からの観光政策の改革に取り組み始め，日本の観光を国際的競争力のある水準にまで高めることを目指している。

2003年４月，国土交通省に開かれた観光立国懇談会は，『観光立国懇談会報告書』を作成し，「住んでよし，訪れてよしの国づくり」という理念を示した。それを受けて2004年４月には，観光立国推進戦略会議が立ち上げられた。同年11月『観光立国推進戦略会議報告書』が具体的提言を提示した。また同年４月から始動した政府・国土交通省の「ビジット・ジャパン・キャンペーン」（VJC）は，2010年までに訪日外国人旅行者1000万人を目標として官民一体で施策を推進中である(2)。

2007年６月の『観光立国推進戦略会議報告書』では，「１.地域固有の宝を生かした，個性豊かな地域づくり」，「２.システム改革による観光消費の拡大」，「３.『美しい国，日本』の実現とその戦略的情報発信」が提言された。

このうち本論文では，同報告書の第１章「⑴地域固有の伝統・文化・歴史・産業・自然等の観光資源を保全，活用するための地域，企業，個人等の取組みの奨励」「⑵観光とまちづくりを地域全体で支える持続的地域経営モデルの創出」「⑶都市と地域，地域と地域の魅力が相乗効果を生むネットワーク型観光の推進」に焦点をあて，現在行われている具体的事例を分析してみたい(3)。

1－2　産学官民連携プロジェクトと観光マネジメント

⑴　産学官民連携プロジェクトにおける「学」の役割―情報収集と情報発信―

美しい大自然の中に身をゆだね，史跡・文化遺産を訪ねて，歴史のロマンに想いをはせながら，自分

を見つめる時間を持ちたい，という観光客が年代，国籍にかかわらず増えている。

観光客がぜひとも訪れたくなるような魅力的な観光地づくりは，その土地の歴史･文化･伝統を観光資源として前面に打ち出し，地域の観光力を高めるところから始まるといえよう。観光地にはその土地独自の個性＝観光力が存在する。しかしその地域に住んでいる人は，それを当たり前とおもい，見過ごしてしまいがちである。地域の潜在的観光資源を発掘し，観光地全体で引き立ててゆくことが必要である。地域全体が，観光客を心から受け入れることができれば，顧客満足度は高まり，またその土地を訪れてみよう，というリピーターが増えるのである。

観光産業の発展のためには，地域社会の歴史･文化･伝統の素晴らしさを発見し，主体的･積極的な情報発信が必要である。観光産業の発展のために，大学･大学院(「学」)の果たす役割は極めて重要となってきている。

第一に，地域の観光力の向上のために，大学・大学院（「学」）には地域観光の情報収集および情報発信という重要な役割が期待される。たとえば地域に訪れる観光客のニーズや動向を調査し，地域に眠る潜在的観光資源を発掘する。それを生かした観光プランや新企画を立ち上げ，地域の観光協会や自治体観光課に提案して地域おこしをすることが可能である。地域の人びとや観光客の目線で観光の実情を調査し（「民」），それを学問的に分析してひとつの提言にまとめ（「学」），観光業界（「産」）や自治体（「官」）へと提言してゆくことが大学･大学院には可能であろう。

第二に，広域観光圏の形成に関して，大学･大学院(「学」)の果たす役割は極めて大きい。観光学部･観光学研究科，史学部･史学研究科，あるいは国際文化研究科，経営学部･経営学研究科，経済学部･経済学研究科など，観光，歴史，文化･伝統，経営･経済に関わる研究者がプロジェクトを形成すれば，自治体の枠を越えた広域観光圏の形成への具体的プランが生まれてくるだろう。

広域観光圏の形成に関する研究プロジェクトが，複数の自治体にある大学･大学院の研究者から構成されれば，各自治体（「官」）や観光産業（「産」）への提言も可能となるだろう。

たとえば研究プロジェクトが，歴史･文化･伝統を共通テーマとした公開講座を企画することが可能であろう。大河ドラマを共通テーマとして，文化財･史跡などを訪ねる旅を企画し，大学教授，地元郷土史家，作家などによる公開講座を開催すれば，ひとつの地域の旅が次の地域を誘発し，さらなる観光需要が喚起されることはまちがいない。こうして「学」の情報収集と情報発信によって，歴史･文化･伝統を共通テーマとしてつなぐ広域観光圏を形成することも可能となる。

第三に，観光ボランティア･ガイドに関しても，大学･大学院（「学」）は多言語による情報発信という点で寄与できるであろう。現在，観光ボランティア･ガイドを設置する地域が増加しているが，観光ボランティア･ガイドは，郷土の歴史を研究する比較的年齢の高い層に支えられてきた。そこで学部生や大学院生，地域の留学生が参加し，ボランティアとして観光ガイドや通訳を務める体制づくりを導入すれば，多言語による情報発信が効果的に実現可能となるだろう。

以上のように観光産業が，持続可能性（サステナビリティ）の高い日本のリーディング産業（基幹産業）へと発展してゆくためには，大学･大学院（「学」）の果たす役割は極めて重要である。

⑵　産学官民連携プロジェクトの重要性

図１は，産官学民連携プロジェクトを筆者が図式化したものである。

観光をめぐる国際環境の変化のなかで，産官学民の相互の連携が極めて重要になってきている。従来のような「官」主導のトップ・ダウンの政策提言だけでは，各観光地の潜在的観光資源を発掘して観光力を高めることは極めて難しいだろう。

「人（観光客）を呼ぶのは人（観光にたずさわる人びと）である」。したがって観光にたずさわる人びとが変わらなければ，提言も施策も戦略も，観光客の心に届かない。

観光とは「光を観る」と書く。つまり人は，観光地とそこで働く人びとが輝いているから，その「光」に引き寄せられてその土地を訪れるのである。素晴らしい自然の景観，美味しい食べ物，効能の高い温泉があっても，それを提供する観光地で働く人びと（サプライサイド）に，「ようこそ来てくださいました」という真のホスピタリティ（もてなしの心）がなければ，美しさも，美味しさも，効能も半減である。そしてその観光客は，二度とその土地を訪れることはなくなるだろう。残念ながら，バブル期においては，顕在的観光資源（自然の美しさや温泉）があることに慢心し，経営を失敗し倒産した企業が数多く存在した。

したがって，日本の観光産業を国際的競争力の高い産業へと発展するためには，観光地に関わるすべての人びとが，「ぜひ私の故郷の素晴らしさを観にきていただきたい」という郷土愛を引き出し，主体的に観光まちづくりに取り組むことが不可欠なのである。

幸いにも，日本各地で観光地域を愛する観光地域の代表（多くの場合は地元のホテル，旅館の経営者）がリーダーとなって，自分自身と従業員，あるいは企業・地方自治体・地域住民との間に，活発なコミュニケーションの場を形成し，潜在的な観光資源を引き出し，つぎつぎと新しいアイディアを実現し，観光誘致に成功している例が多く出てきている[4]。

こうした成功例に学び，独自の観光戦略を展開している自治体がある。宮城県である。

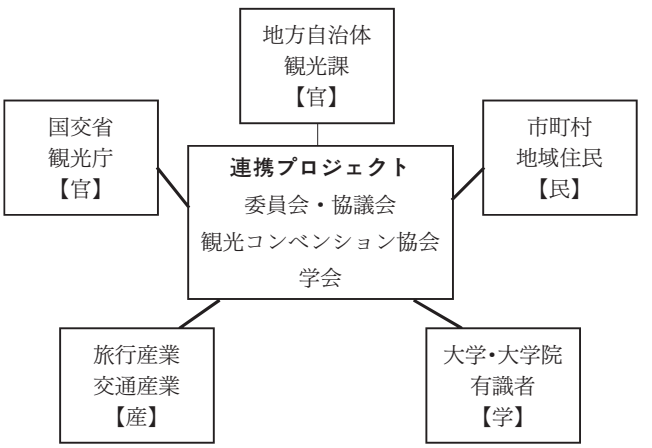

図１　産官学民連携プロジェクト　前原モデル2009 A

宮城県は，「観光立国推進戦略会議」による提言を受けて，「観光王国みやぎ」づくりに取り組んでいる。連携プロジェクトや地域の主体的改革の促進などの観光戦略によって，ハード面・ソフト面の両面からの改革に取り組む宮城県の観光戦略について具体的に見てみよう。

1－3　宮城県の課題と観光戦略

宮城県では，同県の観光の課題を，観光を取り巻く環境変化（外的要因）と観光に関する同県の現状と課題（内的要因）との２つの側面から分析する。

本論文では，外的要因，内的要因に対する課題解決の方向性として，宮城県の潜在的観光資源を「歴史・文化・伝統」「東北観光の拠点」「広域観光戦略」に見定め，この視点から宮城県の観光戦略と観光マネジメントの今後の展望を考察することとしたい。

まずは宮城県の観光の課題について見てみよう。

外的要因としては，①少子高齢化の進展によるシニア層の旅行需要の増加，②団塊の世代の自然志向，田舎暮らしへの憧憬，③団体旅行から個人旅行へのシフト，④オリジナリティのある旅行(歴史・文化・伝統などのテーマのある旅，滞在型の旅，体験型の旅)への需要の増加，⑤とくに宮城県はファミリー旅行より大人の親子，子育て後の夫婦，カップル，ビジネス客を含む男性の一人旅が全国平均を上回る傾向にあること，⑥高速交通体系の整備による日帰り旅行の増加，⑦高速交通体系の整備による地域間の競争，⑧国際空港・仙台空港と路線が開通されている韓国，中国，台湾など東アジアからのインバウンドの増加傾向，などの特徴が見られる。

以上のような，外的要因に対応するための戦略としては，宮城県内の観光力の向上と同時に，東北各県と連携した広域観光圏の形成が不可欠である，と考えられる。とくに2009年度に実現された休日

表１　宮城県の観光の課題

外的要因	① 少子高齢化の進展によるシニア層の旅行需要の増加 ② 団塊の世代の自然志向，田舎暮らしへの憧憬 ③ 団体旅行から個人旅行へのシフト ④ オリジナリティのある旅行(歴史・文化・伝統などのテーマのある旅，滞在型の旅，体験型の旅)への需要の増加 ⑤ ファミリー層よりも，大人の親子，子育て後の夫婦，カップル，ビジネス客を含む男性の一人旅が全国平均を上回る傾向にあること ⑥ 高速交通体系の整備による日帰り旅行の増加 ⑦ 高速交通体系の整備による地域間の競争 ⑧ 国際空港・仙台空港と路線が開通されている韓国，中国，台湾など東アジアからのインバウンドの増加傾向
内的要因	① 地域の意識変革の必要性･･･観光客を観光産業（産）だけでなく，地域ぐるみ（民）とも一体化してもてなす，という意識がない。 ② したがって当然，連携して「もてなす」体制もない。 ③ 観光がもたらす経済波及効果への理解が不足している。 ④ 地域の顕在的観光資源(温泉，自然的景観，食材，文化歴史，伝統行事)が豊富であることに甘んじている。 ⑤ 自ら主体的に，潜在的観光資源の発掘がされていない。

（出所）『みやぎ観光戦略』(5)

の高速道路割引（最高の通行料金1000円）は，高速道路利用の旅行需要を大いに高めた。今後，高速無料化が進めば，これまで関東地方から宮城県を訪れていた旅行客が，より遠くへ足を延ばす可能性があり，宮城県は通過点になる可能性もある[6]。

しかし逆にこのことは，潜在的観光資源を発掘し，魅力ある「観光王国みやぎ」を実現し，さらに東北地方全域にわたる広域観光圏を形成するチャンスである。

いまや時代は，競争の時代ではなく，共生の時代である。各自治体，観光地は，訪れた観光客を地域にロックインするのではなく，ひとつの観光がつぎの旅へと広がるように努力し，また複数の自治体・観光地は互いに協力・連携してゆくべきである[7]。人は，旅を通じて感動を発見し，自らの「想い」を発見してゆく。各自治体，観光地は，ひとつの旅からつぎの観光地へと旅へと広がるような，連携体制を構築すべきである。

広域観光圏が形成され，連携体制が構築されれば，宮城県を東北地方の入り口として何度でもくり返し利用する旅行客が増えるチャンスとなるであろう。

たとえばすでに，「東北三大まつり」による広域観光圏は形成されている。東北地方では広域観光戦略としては，「東北三大まつり」として「仙台の七夕まつり（宮城県仙台市８月６～８日）」「青森ねぶた祭（青森県青森市８月２～７日）」「秋田竿燈祭り（秋田県秋田市８月３～６日）」を巡るツアー旅行企画がある。JTB，近畿日本ツーリストをはじめとする各旅行会社が複数の夏祭りを巡るツアー旅行を長年，打ち出している。三大祭りに加えて，「弘前ねぷたまつり（青森県弘前市８月１～７日）」「五所川原立　武多（青森県五所川原市８月４～８日）」「八戸三社大祭（青森県八戸市７月31日～８月４日）」「盛岡さんさ祭り（岩手県盛岡市）」の夏祭りも PR されている[8]。

内的要因としては，①観光客を観光産業（産）だけでなく，地域ぐるみ（民）とも一体化してもてなす，という意識と体制づくりがない。②観光がもたらす経済波及効果への理解不足，③地域の顕在的観光資源（温泉，自然的景観，食材，文化歴史，伝統行事）が豊富であること，④しかしそれに甘んじて潜在的観光資源の発掘がされていないこと，があげられる[9]。

ではつぎにこれらの課題を解決するための，宮城県の観光戦略について具体的に見てみよう。

1－4　「みやぎ観光戦略」―3つのプランと18の戦略事情―[10]

⑴　みやぎへ「いざなう」観光施策の展開

宮城県では，観光事業において他の自治体と比べて，官民連携の体制づくりという点で先進的な取り組みがなされている。以下のように，宮城県は，「観光王国みやぎ」づくりに取り組んでいる。

宮城県は，北は岩手県，西は山形県，南は福島県に囲まれ，東北地方の入り口に位置する「観光王国」である。蔵王山をはじめとする奥羽山脈のふもとに広大な平野部が広がる宮城県は，豊富な米の生産量と世界三大漁場の三陸沖漁場に近く全国屈指の水揚げ量を誇る。さらに和牛，果物など豊富な食材にめぐまれ，「食材王国みやぎ」をキャッチフレーズとする。

宮城県観光課では，観光誘致のために，広域観光地域の設定，地域全体の観光体制づくり，観光マネジメントの変革に取り組んでいる。宮城県観光課は，さらに多くの人びとに足を運んでもらうため

に，「いざなう！」「もてなす！」「ととのえる！」という３つの観光戦略プロジェクトを策定し，「地域が潤う，訪れてよしの観光王国みやぎ」の形成を実現しつつある。

宮城県への観光誘致の施策として，第一に「みやぎのイメージづくり」として①「関東圏誘客促進事業」，②「首都圏県産品販売等拠点施設運営事業」，③「みやぎのおいしい『食』ブランド化戦略推進事業」，④「みやぎの水産物トップブランド形成事業」を掲げている。

第二に，「みやぎの誘客ピンポイント対応」として，「食材王国みやぎ総合推進事業」を行う。

第三に，「イベント・コンベンションの誘致」のために，「仙台・宮城デスティネーション・キャンペーン（以下 DC と略記）推進事業」を行う。

⑵　みやぎで「もてなす」観光施策の展開

第一に「みやぎのやさしい人づくり」の施策として，①「みやぎ観光ホスピタリティ向上推進事業」，②「外国人観光客安心サポート事業」，③「みやぎ観光理解啓発事業」を行う。

第二に「みやぎのやさしい観光地づくり」の施策として，「仙台・宮城 DC 受入施設整備事業」を行う。第三に「みやぎの地域資源向上」の施策として，①「食材王国みやぎ総合推進事業」，②「みやぎ滞在・周遊型観光資源発掘事業」，③「みやぎの景観形成事業」，④「自然環境保全対策事業」，⑤「みやぎグリーン・ツーリズム推進協議会活動支援事業」を行う。

⑶　観光王国みやぎを「ととのえる」観光施策の展開

宮城県は，観光に関連する各主体の主体的な取り組みを促進し，各主体間の連携・各地域間の連携を図ってネットワークを形成し，また情報の発信によって観光産業を持続可能な産業へと育成・発展させていくことを目指している。

宮城の連携・組織づくりプロジェクトとして，第一に「みやぎの地域力向上組織構築」として，①「全国大型観光キャンペーン宮城県実施推進本部整備事業（県組織体制の整備）」，②「仙台・宮城 DC 推進事業（地域部会の整備）」，③「みやぎ大型観光キャンペーン推進整備事業（観光連盟の強化）」を行う。第二に，「みやぎ東北ぐるっと連携」として，「みやぎ発東北観光体制整備事業」を行う。第三に，「観光力」の向上にむけて，観光関連団体，民間事業者，民間事業者，県民，市町村などの「各主体の役割分担」を明確化し，県が各主体間の調整を図ってゆく。

第２章　広域観光ルート形成と観光戦略

2－1　広域観光ルートとデスティネーション・キャンペーン

⑴　デスティネーション・キャンペーンと観光マネジメント

「みやぎ観光戦略」に出てくるデスティネーション・キャンペーン（Destination Campaign：DC と略記）とは，JR グループ６社（JR 北海道・JR 東日本・JR 東海・JR 西日本・JR 四国・JR 九州）が指定した自治体，地元の観光事業者と協力して行う全国大型観光キャンペーンである。Destination は，目的地・行き先を表し，Campaign とは宣伝を意味する。第１回は，1978年（昭和53年）「きらめく紀州路」

で，現在は，DC 開催の１年前に予行演習を兼ねた「プレ DC」が開催されるケースもでてきた。

⑵ 「仙台・宮城デスティネーション・キャンペーン」

「仙台・宮城 DC」は，2007年10月～12月の３ヶ月間「プレ DC」が開始され，観光客の増加が見られた。翌年2008年10月～12月に「仙台・宮城 DC」が開始された。さらに「DC」終了後の2009年は10月～12月にも，引き続きキャンペーンの形を変え，「仙台・宮城『伊達な旅』キャンペーン」が実施されている[11]。

会員数は，県内自治体38団体，団体28団体，企業14社からなる。

宮城県は，「仙台・宮城 DC」を契機として，持続性のある「観光」を核とした地域づくりを目指し，「自助努力」「連携」「再発見」を取り組みのキーワードに掲げて自治体（県，市町村）と各産業界と連携しながら様々な取り組みを進めている[12]。

「仙台・宮城 DC」の実施は，宮城の観光マネジメントに変革を起こしたといえる。第一に，県民の意識変革である。県内の多くの地域において主体的に観光振興に取り組む「自助努力」の姿勢が現れた。第二に，「連携」の形成である。その結果として第三に，主体的に観光振興に取り組む体制ができあがったといえよう。まさに「仙台・宮城 DC」は新しい宮城の観光マネジメントを形成する大きな契機となったといえる。

⑶ 宮城県観光における経済効果

「仙台・宮城 DC」の行われた2008年度の観光産業の経済効果は，宮城県経済商工観光部観光課の統計の「宮城県の観光消費額・観光による経済効果」（**表１**）によれば，波及倍率が前年比1.69倍，雇用誘発数も85,301人と増加している。

「宮城県の主要なイベントへの観光客入込数」（**表２**）では，「SENDAI 光のページェント」の観光誘致の効果が高い。

表１　宮城県の観光消費額・観光による経済効果

消費区分	観光による総合波及効果（億円）					波及倍率	雇用誘発数（人）
	観光による直接効果額			波及効果			
	日帰り客	宿泊客	計				
宿泊費	—	1,643	1,643	1,277	2,920	1.78	28,504
飲食代	960	483	1,433	967	2,410	1.67	20,923
みやげ代	388	228	616	413	1,029	1.67	8,932
交通費	279	168	447	324	771	1.72	4,934
入場・観覧費	159	51	210	138	348	1.66	3,521
その他	1,220	172	1,392	871	2,263	1.63	18,487
総額	3,006	2,745	5,751	3,990	9,741	1.69	85,301

（出所）観光統計概要（2008年１月～12月）宮城県経済商工観光部観光課　[2]

表 2　宮城県の主要なイベントへの観光客入込数

順位	市町村	観　光　地　点	2008年入込数	2007年入込数	前年比	
					増　減	対前年比
1	仙　台　市	SENDAI 光のページェント	2,860	2,570	290	111.3%
2	仙　台　市	仙台七夕まつり	2,052	2,030	22	101.1%
3	仙　台　市	仙台･青葉城まつり	903	822	81	109.9%
4	仙　台　市	定禅寺ストリートジャズフェスティバル	750	720	30	104.2%
5	仙　台　市	みちのく YOSAKOI まつり	750	700	50	107.1%
6	石　巻　市	石巻川開き	330	333	△ 3	99.1%
7	大 河 原 市	おおがわら桜まつり	250	280	△30	89.3%
8	大　崎　市	古川まつり	145	145	0	100.0%
9	塩　釜　市	塩釜みなとまつり	141	140	1	100.7%
10	大　崎　市	鹿島台互市	135	141	△ 6	95.7%

（出所）観光統計概要（2008年１月～12月）宮城県経済商工観光部観光課

2－2　広域観光ルートの形成と観光戦略

⑴　大河ドラマにもとづく広域観光圏の共通テーマ設定

『観光立国推進戦略会議報告書』第１章では，「共通のテーマに応じ相互に連携して，戦略的に観光客の誘致を進める」ための提言として「観光関係者，商工会議所，青年会議所，NPO 等は，地域内で，農業，漁業，伝統産業，商業・サービス業など幅広い産業間パートナーシップを確立するとともに，周辺地域やテーマを同じくする遠方･海外の観光地と連携することによって，魅力を高めアイデンティティを強化する。また，連携して観光情報の発信に努める」としている。

ここで提言されている観光地を連携する「アイデンティティ」，「テーマ」とは何であろうか。

広域観光ルートを形成するためには，複数の観光地を結ぶ共通「テーマ」と観光地と観光地を結ぶストーリー展開が不可欠である。

周知の如く観光の形態は，集団･団体から個人へとシフトしており，観光の目的は人それぞれ多様となっている。だが，万人に共通することはひとつある。それは，「ぜひ訪れてみたい」という場所を観光地として選定する，という点である。人は自分が訪れたくない場所を目的地に選ぶということはない。人は，「理由はわからないけれども行ってみたい」という「想い」のあるところへ向かうのが本性である。旅は，その目的地の選定の段階で，自分の「想い」がどこにあるのか，そして他人にはない自分独自の「想い」とは何かを教えてくれるのである。旅は，その人の「想い」の発見であり，その意味で旅は，自己発見の第一歩である，ともいえる。

観光の目的のひとつに，歴史･文化･伝統を知る，という≪歴史ロマンと名将を訪ねる旅≫があげられる。訪れる観光地とゆかりの深い人物の人生とその土地の文化･歴史を学びながら，その土地に足を運び旅すれば，時を超えて歴史上の人物の想いを感じとることができるだろう。

本論文では，歴史･文化･伝統のなかに広域観光圏を結びつける共通テーマを見いだし，そのコンセプトを≪歴史ロマンと名将を訪ねる旅≫と規定する(13)。

日本の歴史・文化のなかから共通「テーマ」を見いだす例としては，大河ドラマの活用があげられる。共通「テーマ」設定の事例として，大河ドラマを中心コンセプトとする例を見てみよう。メディア産業を活用して観光地間の連携を形成することが可能であろう。この点については，すでに前原（2008a）において考察したとおり，ＮＨＫ大河ドラマの撮影地が観光地のイメージ形成に果たす役割はかなり重要である。

本論文の主張点のひとつは，広域観光圏形成のための共通テーマ設定に大河ドラマを活用することの有効性を主張する点にある。

広域観光圏形成の共通「テーマ」設定の事例として，大河ドラマを中心コンセプトとする例を見てみよう。**表 3** ≪歴史ロマンと名将を訪ねる旅：広域観光ルート共通テーマの設定　前原モデル2009B≫は，既出の論文での分析をふまえて，広域観光ルート形成のためのコンセプトと展開例を戦略化しシェーマ化したものである[14]。

前原（2008）で考察したように，NHK 大河ドラマの放映が，舞台･撮影地への継続的な観光客増加に寄与したケースとして，「独眼流政宗」（1987年放映）の宮城県仙台市，「炎立つ」（1993年放映）の

表 3

≪歴史ロマンと名将を訪ねる旅：広域観光ルート共通テーマの設定　前原モデル2009Ａ≫

大河ドラマ（放映年）平均視聴率	歴史上の人物	観光地（出生地，居城，菩提寺など）	観光イベント	温　泉
「独眼流政宗」（1987年）39.7%	伊達政宗（だてまさむね） 片倉小十郎（かたくらこじゅうろう） 伊達成実（だてしげざね）	宮城県（江戸時代の本拠地） ・岩出城 ・仙台城（青葉城） ・瑞鳳殿 白石城（片倉小十郎の居城） 多賀城 山形県米沢市（戦国時代の本拠地） ・米沢城 福島県会津市 ・黒川城	七夕まつり 仙台･青葉まつり SENDAI 光のページェント 小十郎まつり	作並温泉 秋保温泉
「武田信玄」（1988年）39.2% 「風林火山」（2008 年）18.7%	武田信玄（たけだしんげん） 上杉謙信（うえすぎけんしん）	山梨県甲府市 長野県長野市 ・川中島古戦場跡 ・海津城跡 ・善光寺 新潟県春日山城	信玄公祭り 鉄砲祭り	下部温泉 松代温泉
「功名が辻」（2007年）20.9%	山内一豊（やまのうちかずとよ） 妻・千代（つま　ちよ）	滋賀県長浜市（最初の居城） ･長浜城 高知県（江戸時代の本拠地）	長浜城着物祭り	
「天地人」（2009年）	上杉景勝（うえすぎかげかつ） 直江兼続（なおえかねつぐ） 石田三成（いしだみつなり）	新潟県・春日山城 福島県会津市 山形県米沢市・米沢城・上杉神社 滋賀県長浜市・長浜城	愛･天地人博 米沢　愛と義のまち 天地人博2009	

（出所）前原（2007a）（2008a）（2008a）（2009）から再編成[16]

岩手県江刺市,「秀吉」(1996年放映) の滋賀県長浜市があげられる。なかでも大河ドラマ「独眼流政宗」は，従来の伊達政宗公のイメージに,「独眼流」という新たなイメージを加えたことが，放映を契機とした観光客の継続的増加につながった。

３つの事例が「ベースアップ型」となって観光客の持続的誘致に結びついた成功の理由は，地域の一体感に支えられた観光マネジメントにある[15]。

(2)「天地人」でつなぐ越後・会津・山形

2009年 NHK 大河ドラマ「天地人」を共通コンセプトとし,「『天地人』でつなぐ越後・会津・山形」というキャンペーンが展開されている。「義と愛に命を賭けた知謀の将」というキャッチフレーズで直江兼継を紹介し,「天下人に挑み続けた歴史の舞台へ」の旅を紹介する。キャンペーンは，直江兼続の「愛」と「義」の精神を育んだ故郷・越後の国から紹介する。

直江兼続は，上杉景勝の小姓として仕え，越後・春日山城で景勝とともに上杉謙信から「義」の精神を受け継いでゆく。

山形県米沢市の上杉神社は米沢城の本丸跡に建てられた上杉謙信をまつる神社で，宝物殿には直江兼継の「愛」の前立てのある甲冑が所蔵されている。上杉博物館では「米沢　愛と義のまち　天地人博2009」が開催されている[17]。

自治体の異なる複数の観光地をつなぐ広域観光ルートが,「東北観光推進機構」のもとに形成されつつある。JR 東日本, JTB など民間企業と地元自治体との連携プロジェクトによってさまざまな企画が打ち出されている。

NHK 大河ドラマ「天地人」の上杉謙信役の俳優・阿部寛が撮影現場である新潟県春日山城で，地元の人びとの熱烈な歓迎を受けた。涙ぐみながら握手するお年寄りとの交流は，さながら領主と領民の再会のような熱気であったそうだ[18]。

人は，郷土に対する想いによって，一体感が生まれつながってゆくのである。そして人と人との和が，さらに人を引きつけるのである。それが観光の基本である。

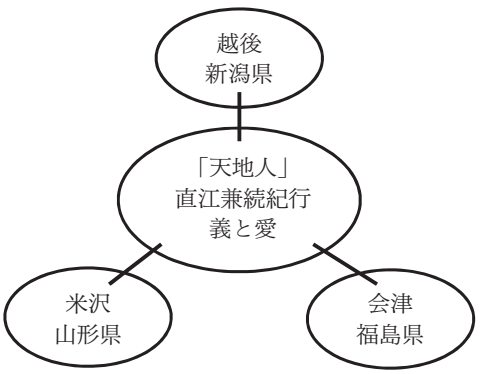

図 2　天地人・直江兼続紀行―越後・会津・米沢―

⑶ 「功名が辻」と琵琶湖

2006年には，ＮＨＫ大河ドラマ「功名が辻」の山内一豊と妻･千代をコンセプトとして滋賀県長浜市から琵琶湖周辺の広域観光ルートを形成した事例がある。長浜市観光協会とJR西日本，ＮＨＫなどが連携して展開した一連のイベントは，＜歴史のまち・長浜＞というイメージ形成に寄与したといえよう[19]。

メディア産業との連携によるイメージ形成で最新の事例は，2009年10月３－４日に行なわれた岐阜県「ぎふ信長まつり」である。岐阜市政120周年記念を記念して，イベントの織田信長役に，岐阜出身の俳優･伊藤英明を招いた。まつりのスタートは，10月３日（土）の信長公追悼式である。翌日の10月４日（日），伊藤英明扮する織田信長を先頭に行列は，岐阜駅前を出発した。その行列に，一般公募の市民から選ばれた斉藤道三，濃姫とつづいた。郷土が生んだ歴史上の人物･織田信長を郷土から輩出された俳優・伊藤英明が演じることで，地域の人びとの郷土愛が高揚する盛大なまつりとなった。その光に引き寄せられて，観光客が増加したのも当然といえよう。過去最高の50万人もの観光客が集まった[20]。

⑷ 「歴史ロマン：伊達政宗を訪ねる旅」―宮城・山形・福島―

周知の如く，江戸時代の伊達政宗の居城は，現在の宮城県仙台市にあった仙台城（青葉城）である。それに対して戦国時代の伊達政宗の本拠地が山形県や福島県にあったことは，これまであまりクローズアップされてこなかった。1987年「独眼流政宗」放映年においては，山形新幹線も山形自動車道も開通していなかったためにアクセスがよくなかった。

仙台･青葉まつりには，伊達政宗役の渡辺謙，愛姫役の桜田淳子が参加し，過去最高の観光客数となった。「独眼流政宗」放映の５年前にすでに東北新幹線が開通していたこと，仙台市内の地下鉄南北線の開通などのインフラ整備，また放映年には「’87未来の東北博覧会」が開催されたことなどいくつもの要因が重なった結果，観光入込数が爆発的に増加した。「SENDAI光のページェント」は1987年の放映にあたって開催された。

福島県も山形県と同様に，戦国時代の伊達政宗のゆかりの地である。「独眼流政宗」から20年を経た

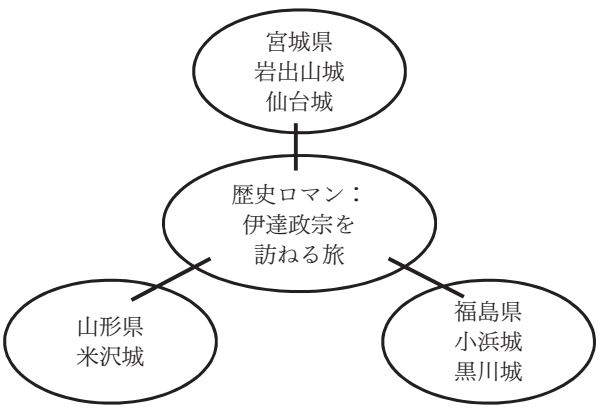

図３　歴史ロマン：伊達政宗を訪ねる旅―宮城・福島・山形―[22]

今，交通網も発達し，宮城―山形―福島を≪歴史ロマン伊達政宗を訪ねる旅≫という共通テーマで広域観光圏を形成することが可能となったといえる[21]。

第3章　日本の歴史・文化・伝統と広域観光ルートの形成

3－1　≪歴史ロマンと名将を訪ねる旅≫をコンセプトとした広域観光ルートの形成

歴史を翻ってみれば，戦国時代は，日本の変革期であった。そして数多くの名将と呼ばれる人物が現れた時代であった。たとえば武田信玄は，治水工事によって川の氾濫を抑え，農業用水を確保した。それによって甲斐の石高は一気に増加し，民は豊かになり，安寧な生活ができるようになった。だが領主による領国の統治によって，領民が安寧な生活を送れるような体制が構築されるまでには，長い歳月が必要であった。領主は，幼いときより学問の師につき，多くは中国の歴史から人生哲学，兵法・戦略，国内統治などについて学び，領国の経営哲学・戦略を考えた。

戦国時代から江戸時代にかけて，領主，藩主たちが初代，二代，三代と受け継いできた城づくり，城下町づくり，寺町づくり，そして治水事業，潅漑事業，殖産工業事業が，現在の各地方自治体の基礎となっているのである。

≪歴史ロマンと名将を訪ねる旅≫によって，現在の地方自治体の基礎が，地域を愛する気持ち（郷土愛）によって堅くむすばれた領主と領民との一体感によって築かれたことがわかるだろう。

3－2　伊達政宗の領国経営と経営戦略―米沢，仙台城，白石城―

(1)　伊達政宗の治世

本節では，**表4**「伊達政宗」にもとづいて東北の雄として知られる伊達政宗の人生哲学と領地経営に学んでいきたい。

宮城県は，杜の都，七夕まつりで有名である。宮城県庁所在地・仙台市の繁栄のはじまりは，仙台藩主・伊達政宗による。七夕まつりの伝統も，政宗が行ったことがはじまりである。

現在，JR仙台駅周辺には，近代的なビルが立ち並び，観光客，ビジネスマン，買い物客がにぎやかに通りを行き来している。駅を背にして青葉通りをしばらく進むと，山を背景とした美しい風景が開ける。仙台博物館，東北大学，そして仙台城（通称・青葉城）の追手門がある。仙台城は，現在は，石垣のみを残すにとどめているが，その石垣の大きさが当時の仙台城の規模の大きさを物語っている。山頂の城跡には，伊達政宗公の馬上の銅像が仙台市を見守るようにして建てられている。

慶長5年(1600年)，伊達政宗は仙台城の縄張りを開始し城下町を築き，さらに防火林，防風林，防雪林の植樹奨励，水の供給確保などを行い，それによって仙台城下町は奥州一の都市となる。白石城を居城とする家老の片倉氏は，代々，家臣一族に城を与え「要害」制度によって藩内を統治した。当時，一国一条令が引かれている中，異例の統治であった。

代々の伊達藩主による優れた治世によって，江戸中期になると実高100万石にまで石高を上げ経済的に繁栄した。伊達氏は，代々「奥羽守」を称し，東北の雄藩となった。

瑞宝殿は，伊達政宗を祀る神社として広く知られている。

瑞鳳殿は，寛永13年（1603年）七十年の生涯を閉じた仙台藩の祖・伊達政宗公の霊屋である。政宗の遺命によって仙台市の経ケ峯に造営された瑞鳳殿は，桃山様式の遺風を残す豪華絢爛な廟所である。その後，二代藩主・忠宗公の感仙殿，三代藩主・綱宗公の善応殿など歴代の藩主の御廟が建てられた。資料館には，霊屋の発掘調査の状況が記録映画で放映されている。

⑵　伊達家を支えた二人のナンバー２

伊達政宗には，伊達家の双璧と呼ばれる二人のナンバー２がいた。「武の伊達成実，智の片倉景綱」である。伊達成実は政宗の従兄弟で武力の天才。片倉景綱は智勇を兼ね備えた人物であった。

片倉景綱は，時の天下人・豊臣秀吉が，その智恵と才覚を大いに評価し，三十万石で直臣としてとりたてようと申し出たほどの人物であった。しかし景綱は，政宗への忠義から秀吉の申し出を辞退したという。

片倉景綱の出生は，弘治３年（1557）。米沢の成島八幡神社の神職である父･片倉景長と，本沢刑部真直の娘との間に生まれた片倉家の次男である。通称･片倉小十郎という。

伊達輝宗の小姓として仕えた景綱は，その才を見込まれ，伊達政宗の近侍となった。天正３年（1575），景綱19歳，政宗９歳のことである。剣術に秀でていた景綱は，幼少期の政宗の剣術指南を務めた。政宗の初陣の日，敵を深追いし敵に囲まれた政宗を，景綱は「伊達政宗ここにあり！」と叫んで敵を引きつけ，政宗の窮地を救った。これにより政宗と景綱の絆はより強く結ばれたのだった。その後も景綱は，伊達政宗の軍師として，大いに活躍し政宗の危機を幾度も救った。

現在，白石市には，軍師・片倉小十郎景綱の白石城が当時の姿を忠実に復元されている。

江戸幕府は，元和の一国一城令によって各藩に大名の居城以外には城をもつことを禁じ，支城をことごとく破却せよ，という命令を出した。だが，そうした状況の中で伊達家のみ，特別に支城である白石城の存続の許可が下り，幕末までその姿を保ったのである。

表４　「伊達政宗」[23]

名　　前	伊　達　政　宗（幼名　梵天丸）
両　　親	父・輝宗（源氏）　　母・義姫（山形城主・最上義守の娘）
生　　涯	永禄１０年（1567）～寛永13年（1603）享年70歳 仙台藩祖　天正１２年（1584）～寛永13年（1603）
師と学問	虎哉宗乙
	仏教の真髄，五山文学，中国の兵法書，武芸七番などに学ぶ
近　　習	伊達成実，片倉景綱（片倉小十郎）
居　　城	米沢城　⇨　仙台城
旗　　印	紺地金日の丸旗
墓　　所	仙台市経ケ峯　瑞鳳宝

⑶　伊達政宗の人生

伊達政宗は，永禄十年（1567）８月３日，父･輝宗，母･義姫との間に嫡男として生まれた。幼名･梵天丸。輝宗は源氏の流れをひく名門，伊達家の第16代当主，義姫は山形城主・最上義守の娘であった。

伊達家は，晴宗，輝宗，政宗と三代にわたって米沢城を拠点とした。米沢城は政宗が奥州に覇権を立てるに至る本拠地であった。

政宗の人生は，しかし不遇の事態から始まった。五歳の時，政宗は疱瘡（天然痘）にかかり，右眼の視力を失ったのである。そのため政宗は右眼を覆い隠さなければならなくなった。

政宗の性格は暗くなり，人眼を避けるため部屋に閉じこもる日々が続いた。

母の義姫は，そうした政宗に近寄らなくなり，二歳年下の次男の小次郎（幼名・笠丸）をかわいがるようになった。政宗は，ますます心を閉ざすようになった。

だが天は，政宗に強力な助け船を用意していた。それは父・輝宗であった。

輝宗は頭脳明晰で剛胆な性格の持ち主であった。かつまた輝宗は時代の先を見通す先見性と慎重な性格をも兼ね備えていた。一言でいえば輝宗は，いわゆる人物であった。政宗の苦悩を陰でじっと見守っていた輝宗は，人の人生を決定づけるのは学問である，と考え，政宗の人生の師として虎哉宗乙（こさいそういつ）を選出した。政宗は虎哉宗乙に師事し，仏教の真髄，五山文学，中国の兵法書，武芸七番などを学び，心に光を吸収していった。

宗乙から，人生は自らの気力で切り拓かれてゆく，ということを学んだ政宗は，人間は容姿よりも，むしろ心の持ち方が大事である，と考えるようになった。

政宗の近習には，片倉小十郎景綱と伊達成実が選出され，政宗の両脇を固めた。

輝宗が，こうしたすぐれた人材を身近に置いてくれたお蔭も手伝って，政宗の気力はみなぎり，性格もさらに強くなった。政宗は，父･輝宗の後を継いで，立派な領主となり，そして奥州の覇者となって伊達家の繁栄と領民の安寧のために尽くすことに明確な人生の目標を見定めた。

天正７年（1579）の冬，政宗は三春城主・田村清顕の娘・愛姫（めごひめ）を正室として迎えた。政宗13歳，愛姫11歳であった。

初陣を機に武功を重ねていった政宗の名はしだいに高まっていった。

政宗が活躍するにつれて，伊達家は政宗の才能に期待する派と，実直な弟の小次郎派とに二分していった。母の義姫とその実家の領主・最上氏が，小次郎派を後継していた。最上氏は隙あらば，伊達家を倒そうと画策していた。

さらに伊達家を取り巻く周囲には，相馬，芦名，最上，二階堂，石川，岩城，白川，結城，佐竹などの敵がひしめいていた。

天正11年（1583）10月，政宗の見事な采配や戦略に類まれなる領主としての才能を見いだした輝宗は，41歳の若さで隠居を決意し，政宗に後継の座を譲った。

18歳の若さで伊達家17代当主となった政宗は，輝宗の寛大な心とおもいやりの心に感謝し，父の愛に感激した。が，それもつかの間，天正13年（1585）には大事件が発生した。

閏８月，政宗を有名にした戦に「小手森城の撫(な)で斬(ぎ)り」という一戦である。

政宗は，相馬氏との戦いに勝利を治めた後，会津黒川城の芦名氏との戦いに勢力を注いでいた。

小浜城主の大内定綱は，表面的には伊達家の傘下の立場をとりながら，実は芦名氏の傘下にあった。定綱の優柔不断な態度に怒った政宗は，大軍を定綱討伐のために向けた。定綱は，芦名氏，畠山氏などの援軍を得て戦ったが，つぎつぎと支城が落ちていった。局地戦の小手森城の戦いで，伊達軍は，敵兵だけでなく婦女をも合わせて八百名以上を皆殺しにし，牛や馬に至るまで殺した。

支城の相次ぐ陥落に震えあがった定綱は，小浜城を捨て芦名氏のもとへ落ちていった。

政宗は，合戦は悲惨な結果をもたらす，ということを世に示した。それによって，政宗の元に服従を申し出る領主がつぎつぎと現れた。

二本松城の畠山義継もそのひとりであった。が，畠山義継は，定綱に味方したため，政宗の処罰を恐れ，政宗への取りなしを輝宗に依頼した。輝宗は，和解の条件を示して義継を許した。だが，輝宗の和解の条件が気にいらなかった義継は，人質として輝宗をさらい逃亡したのだった。

輝宗は，「自分もろとも義継を撃て」と政宗に命じた。政宗は涙をのんで父の命に従ったのだった。輝宗は，自らの生命を賭けて政宗と伊達家を守った。享年42歳。

輝宗の死後，政宗の快進撃は続いた。

天正13年（1585），11月，政宗は五千の兵を指揮し，「人取橋の戦い」で佐竹・芦名・岩城・石川・白川の連合軍を破って勝利した。翌天正14年（1586）には二本松城の畠山氏を滅ぼした。そして天正16年（1588）の「郡山合戦」，天正17年（1589）の「摺上原合戦」で佐竹･芦名連合軍に連勝した。ついに宿敵の芦名氏は滅びた。

伊達家中のだれもが，政宗の軍事上の才能を認めていた。かくて政宗は，奥州制覇の目標達成にむけて大きく前進した。

おわりに

本論文では，観光産業が日本のリーディング産業へと成熟するためのポイントとして，各自治体の観光力の向上と，広域観光圏の形成について宮城県を例に検討した。

現在，観光産業においては，大自然の美しさ，文化財・歴史的建造物，温泉，美味しい食べ物，といった顕在的観光資源を大切にしながら，さらに日本の歴史･文化･伝統の中に潜在的観光資源を発掘してゆくことが強く求められている。

その実現のためには，≪歴史ロマンと名将を訪ねる旅≫という共通テーマにそって広域観光圏を形成することが可能であろう。

歴史ロマンと名将の足跡を追ってひとつの観光地から，つぎの観光地へと足を運ぶことが可能となれば，観光客にとって旅が想いの発見となり，自分を見つめなおす機会となるであろう。また観光地にとっては，ひとつの旅がまた次の旅の需要を生みだし，経済的波及効果も高まるであろう。そのことが地域の観光力をさらに高めてゆくであろう，と予想される。

付記　本論文は前原直子氏との共同研究の成果である。

注

(1)　UNWTO（世界観光機関）による。

(2)　観光産業は，雇用を生み出し，地域経済を活性化させる。その経済波及効果は，ホテル業，旅館業など狭義の観光産業にとどまらず，第１次産業，運輸業など他の産業部門にも及んでいる。1000万人の目標が達成されれば29.7兆円産業となり，日本経済への貢献も高く，21世紀の日本のリーディング産業（基幹産業）として期待されている。国土交通省は，観光カリスマ，観光プロデューサーなど観光産業における人材育成にも着手している（前原,2008)。

(3)　第１章では17の提言，第２章では14の提言，第３章では11の提言がなされている。

(4)　前原（2008）（2009）参照。

(5)　表１は，『みやぎ観光戦略』より抜粋した内容を筆者が作図した。

(6)　日本交通公社「旅行者動向2005」によれば，宮城県を訪れる観光客のシェアは，東北域内から47.7%，関東地方から33.3%，両地域で81%をしめている。

(7)　ロックインとはひとつの企業や事業体が顧客を囲い込むことである。

(8)　ツアーの場合の観光地への経済効果として問題点は，宿泊地以外の観光地は通過点になってしまう点である。「五所川原立ねぶた」がその例である。また宿泊施設はほぼツアーで満室状態であるため，個人の顧客が，三大祭りを個人で見たい場合，旅を個人で宿に直接予約することが極めて難しい。

(9)　長野県にも同様のウイークポイントがある。前原（2008)。

(10)　以下，この節では『みやぎ観光戦略』報告書を参照。

(11)　2006年４月 JR 東日本の社長に仙台出身，東北大学出身の清野社長が就任すると，宮城県村井知事は，DC として「仙台・宮城 DC」を指定することを要請，また DC 終了後の2008年も引き続き JR キャンペーン地に指定してくれるよう要請した。

(12)　「われわれを助けるのは偶然の力ではなく，確固とした目標に向かってねばり強く勤勉に歩んでいこうとする姿勢なのだ。」「自助努力」self-help は，19世紀イギリスの作家・S.スマイルズ（Samuel Smiles, 1812-1904）の主著『自助論』（Self-Help,1859）で主張されている概念である。「天は自ら助くる者を助く」という一文はことに有名である。日本では明治維新直後に中村正直によって翻訳され『西国立志編』として紹介され，福澤諭吉の『学問のすすめ』とともに近代化を志す若者に広く支持された。近代日本の思想の基礎を形成することに貢献した著作であり，現在もなお，全世界で読まれている。スマイルズは，スコットランドに生まれエディンバラで医者を開業したのち，著述業に専念した。スマイルズは，「どんな分野でも，目標をめざして精一杯努力しなければすぐれた業績は上がらない。この点を，われわれは固く肝に銘じておくべきである」と述べ，人生における自己努力の重要性を一貫して主張する。こうした思想は，J.S.ミル(John Stuart Mill,18－18）の経済理論において生かされている。「連携」も，19世紀イギリスのアソシエーション論において展開されている概念である。19世紀イギリスの政治経済状況は，現在の日本が直面している問題を考察するうえでの視座を提供している。この点については，前原（2006）（2007）（2008）を参照。

(13)　すでに前原（2008a）（2008b）において研究発表ずみであるが，歴史・文化・伝統を観光資源として前面に押し出し，共通テーマを設定し，広域観光圏を形成するプロジェクトの推進が期待される。

(14)　前原（2007a）（2008a）（2009b）参照。

(15)　前原（2007a)。大河ドラマの分析の先行研究に中村（2003）がある。

(16)　表３は筆者の作図である。「NHK 大河ドラマの平均視聴率の推移」についてはビデオリサーチ（関東地方）による。1963年の「花の生涯」以降で歴代第１位は「独眼流政宗」である。視聴率第２位は「武田信玄」（中井貴一主演）である。http: www2.ttc.ne.jp

(17)　JR 東日本のキャンペーン。図２はキャンペーンのコンセプトを筆者が図式化したものである。

(18)　「NHK スタジオパーク」での阿部寛の対談。「ロケの為に上越にいったらすごく大勢の地元の謙信ファンが出迎えてくれ，私は本当に謙信が今でも上越の人からとても愛されていると感じ入りました」。

(19)　前原（2008）参照。

⑳ 『毎日新聞』2009年10月４日。

㉑ 仙台市・山形市・福島市の３市は2005年以降，連携が進んでいる。2005年５月には３市で「広域観光連携の推進に関する覚書」が交わされ，2005年７月には３市の各経済同友会で「南東北経済同友会観光推進連携会議」が設定されている。

㉒ 図３は筆者の図式化による。

㉓ 筆者の作図。

参考文献

学習研究社，2009『伊達政宗』

小林清治，2008『伊達政宗の研究』吉川弘文館

司馬遼太郎，1978『馬上少年過ぐ』新潮社

童門冬二，2009「『一期一会』の緊張感が鍛え上げた独眼竜とその軍師」『歴史街道　平成21年９月号』

㈳日本観光協会「平成20年度調査速報　観光の実態と志向」

中村哲，2003「観光におけるマスメディアの影響」（前田勇編著『21世紀の観光学』学文社）

前原正美，2007a「変革期の企業マネジメントとリーダーシップ論―プラザ合意以後の国際経済の変動と観光ビジネス―」『東洋学園大学紀要』第15号平成19年３月

前原直子，2007b「人間的成長を可能とする経営組織論とリーダーシップ論―J.S.ミルの経営組織論と人材育成論に依拠して―」『人材育成学会　第５回年次大会論文集』

前原正美，2008「メディア産業と観光産業―大河ドラマと観光ビジネス―」『東洋学園大学紀要』第16号平成20年３月

前原正美・前原直子，2008『観光産業とメディア産業』前原出版

前原正美，2009「異文化理解・文化交流とツーリズム―コミュニケーション力の育成と観光マネジメント―」『東洋学園大学紀要』第17号平成21年３月

Mill, J. S., 1848. *Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy, in Collected Works of John Stuart Mill*, Vol.I-XXI, ed.by Routledge & K.Paul, 1965-74. 末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫，第１－５分冊，1959-63.

Smiles, S., 1859, *Self-Help: With Illustrations of Character, Conduct, and Perseverance*, London（竹内均訳『自助論―人生の師・人生の友・人生の書』三笠書房）

http: //www.yjtm.jp/contents/outline-holding/ja/

http: //www.milt.go.jp/sogoseisaku/kanko/mr kanai.html

http: //www.niohn-kankou.or.jp

http: //www.milt.go.jp/sogoseisaku/kanko/mr kanai.htm

http: //www.jnto.jp/vcj/about.html